

新しい時代の放射光科学と学会

朝倉清高 (日本放射光学会会長)



明けましておめでとうございます。

昨年の名古屋の年会は、いつものように、年始の慌ただしい中、つつがなく行われました。“東北計画は順調に進捗している、AO SRIを東北で行おう”、“60周年記念事業をどうしよう”、“コンピュータウイルス Emotet が広がっている”などが話題になり、また多忙な一年になるという予感を持ちました。ところが、2月になって世界が変わってしまいました。中国の武漢で始まった肺炎のような病気、COVID-19が、日本にも上陸し、パンデミックが世界を覆い尽くして、いまでも毎日世界全体で10,000人以上の人が亡くなっています。こんな状況を誰が予想したのでしょうか？ 60周年記念事業、施設代表者会議、AO SRI が延期になりました。全国に緊急事態宣言が発令され、外出や活動の自粛が要求されました。大学の多くが閉鎖され、在宅勤務というのが当たり前になりました。春先には、放射光実験のかなりの部分ができなくなるという異常事態に陥りました。そんな制限の中で、あたらしいデジタル技術を用いた試みがはじまりました。5月にはオンラインで評議員会を開催し、基礎講習会や今年の年会もオンライン開催で行うことになりました。6,7月にはユーザの放射光実験ができるようになっていました。とくに、多くの施設で、リモート実験、代行実験も大々的に試みられたのではないかと思います。この試みは従来の放射光利用の常識を大きく塗り替えるものでした。1970年代、80年代からの放射光実験というものは、徹夜が当たり前でした。しかし、この試みはサンプルを送ったら、データが出てくるという新しい実験スタイルを提示しています。これは革命的なことです。放射光実験に対するいままでの敷居の高さが下がり、利用が増えることになり、放射光科学が相転移的に発展する可能性を意味しています。一方でこうした急激な変化は様々な問題を噴出させ、混沌と混乱を生む可能性もあります。

おそらく、ワクチンもでき、今年の半ばにはオリンピックが東京で開催され、嘘のように平和な日常が戻ってくるかもしれません。しかし、日常が戻ったからと言って、放射光科学を従来の放射光科学に完全に戻す必要はないと私は思います。むしろ、これを機会に新しい放射光科学を創出して行くことが大切だと思います。十年前からはじめていた Big data—AI 技術とあいまって、これから2020年代の大きな変革の時代にいよいよ突入したと思います。おそらく、この変革に伴い、混沌と混乱、カタストロフィーがおこると思いますが、放射光学会は、この変革に対して恐れることなく、それを交通整理し、混乱を少なくして、円滑に新しい放射光科学へと変異するための取り組みを行うべきであると思います。

放射光学会としても学会のあり方を変える必要があると思います。これまでのように実際に現地に赴き、面と向かって議論し、あるいは酒を酌み交わし、夜どおし語り合うことは大切です。一方で、わざわざ出向かなくても、目的を達成できるようになったこの時代、この新しい技術を持ったいまだからこそ、従来不可

能と思われた多くのことが可能になっています。広報にしても、紙主体から Web やネットワークへと変わってきています。今後、従来から行われていたよい面と新しい技術によりもたらされたよい面を融合した放射光学会を私たちの手で創造するべきと思います。特に若い人たちの力を借りて、かれらの柔軟な考え方や発想、もうすでに身につけてしまった新しい習慣などを積極的に取り入れていく必要があると思います。学会の存在が、“腹藏なく胸襟を開いて愉快に共通する学問を語り合う場”であることを忘れなければ、こうした新しい激流の中にあっても、正しい学会のあり方は見えてくるように思います。

今年もまだまだ困難な事態が続きますが、すべての皆さんと知恵を出し合いながら、乗り越えていきたいと思っています。どうぞ元気で、一緒にがんばりましょう。